

## 研究テーマ

# 進んで体を動かそうとする意欲を育てる援助の在り方

～十分に体を動かして遊ぶ体験を通して～

沖縄市立宮里幼稚園  
教諭 田中 彩乃

## I テーマ設定の理由

近年、少子化、核家族化、情報化等の急激な変化にともない、子どもの育ちにおいて、基本的な生活習慣の欠如、コミュニケーション能力の不足、規範意識の希薄化、運動能力の低下などが指摘されている。中でも運動能力の低下については、ゲーム機器の普及や思い切り遊ぶことのできる場所や時間・友達の減少、戸外遊びの減少などが要因として考えられている。そのため、幼稚園での教育活動として、友達と一緒に思い切り体を動かして遊ぶ体験が求められている。

幼稚園教育要領の「心身の健康に関する領域『健康』」では、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」ことを目的とし、「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」意欲や態度を育むことをねらいのひとつにあげている。また、「幼児の興味や能力に応じた遊びの中で、自ら十分に体を動かす心地よさを味わうことができるようにすることが大切である」と記されている。

本園の幼児の実態を見てみると、主体的に好きな遊びを見つけ、元気よく園庭にとびだし、鬼ごっこや砂遊び、木登りなどを楽しんでいる子が多い。反面、戸外遊びを敬遠する子や運動的な遊びに興味を示さない子もあり、運動の二極化の傾向が見られる。

また、これまでの保育を振り返ってみると、健康な心と体を育てるため、体育活動や主体的活動の中に運動的な遊びを多く取り入れ、興味を持たせるような援助を心がけてきた。しかし、一人一人の遊びの経験や発達の違いが大きく、個に応じた援助の難しさを感じていた。

また、遊びの中で体を動かす楽しさを十分に味わわせることができず、逆に苦手意識を持たせ、運動的な遊びを敬遠させてしまったのではないかという反省点もあげられる。

そこで、本研究では、一人一人の家庭や園での遊びの様子を把握し、どの子も無理なく、楽しみながら運動的な遊びに取り組むことができるように、よりきめ細やかな個に応じた援助を心がけていきたい。幼児の興味や能力に応じた遊びの中で、幼児が思わずかかわりたくなるような環境構成や教師の援助を工夫することにより十分に体を動かして遊ぶ楽しさを味わい、進んで体を動かそうとする意欲が育つであろうと考え、本テーマを設定した。

## II 研究構想図



## III 研究内容

### 1 理論研究

#### (1) 幼稚園教育要領「健康」の捉え

##### ① 領域「健康」のねらいと改訂の要点

幼稚園教育の目標の一つは、「健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること」(学

校教育法第 23 条 1) である。この目標を実現するために領域「健康」のねらいは立てられており、今回の改訂においてもこれまでのねらいはそのまま引き継がれている。ねらいは同じであるが、近年の社会の変化を踏まえ、ねらいを達成するために必要な指導内容及び内容の取り扱いに修正を加えている。

(詳しくは、報告書を参照)

## ②「健康」の領域で育てたい子どもの姿

無藤隆<sup>1)</sup> 監修の「幼稚園教育要領ハンドブック」によると、「健康」の領域で大切にしたいことは、「しなやかな心と体をもった子どもを育てることである」と明記され、「しなやかな心とは、友達の気持ちに気付いたり、譲り合ったり、ぶつかり、葛藤し、乗り越えていくといった柔軟な心であり、しなやかな体とは、体を動かす喜びを感じ、道具などを使いこなしていくような、柔軟な体をもつことを指している。つまり、『健康』であることが、幼児のすべての活動の土台になる」と述べている。

## ③心と体を動かして遊ぶことの意義

幼児は「体を通して理解する」といわれるように、全身で運動遊びの楽しさや難しさを感じ取っている。湯川<sup>2)</sup> は「遊びは幼児の表現活動そのものでもあり、幼児の心と体をバランスよくつなげ、一体化するものである。遊び込む事によって、幼児の心と体の結びつきはいつそう強められていくのである」(『幼稚園じほう』2003 第 4 号) と述べている。そこで、幼児は興味をもった遊びに夢中になって取り組む中で、心を動かし体を動かすようになり、教師の適切な援助を受け、自分の思いを実現しようと能動的に活動することで豊かな遊びとなり、幼児の身体諸機能の発達が促され、しなやかな心と体が育まれていくと促えた。

## (2) 幼児期の発達の特性

### ①幼児期における発達の特性

幼児期は身体諸機能が著しく発達する時期

であり、特に神経系の発達が著しい(スキヤモンの発達曲線より)のが特徴である。白石<sup>3)</sup> は、「人間には運動を身につけるのにとっても適した時期が 3 つある」と述べており、「その第 1 期が幼児期(歩き始めた 1 歳から小学校に入るまでの 5 年間)である」としている。「この時期は、脳をはじめとして体内にさまざまな神経回路が張り巡らされ、適切な運動刺激が与えられれば人間として必要な動きのほとんどを身につけることができる」と述べ、「歩く」「跳ぶ」「投げる」「捕る」などの人間として必要不可欠な基本的運動能力の発達を促していく必要性を述べている。

### ②運動発達の段階について (報告書を参照)

### ③幼児期に身につけておきたい基本的運動技能

(表 1 幼児期に身につけておきたい 36 の基本動作)

	基本的運動技能 (幼児期：3～6歳)
●姿勢の変化や安定性を伴う 9 つの動作	立つ、組む、乗る、逆立ち、渡る、起きる、ぶら下がる、浮く、回る
●重心の移動を伴う 9 つの動作	走る、登る、歩く、跳ねる、泳ぐ、跳ぶ(垂直に)、くぐる、滑る、はう
●人や物を操作する 18 の動作	持つ、支える、運ぶ、押す、当てる、掘る、蹴る、捕る、押さえる、振る、投げる、こぐ、渡す、倒す、引く、つかむ、積む、打つ

幼児期は、これらの多彩な動きが、量的に増え、動きのレパートリーが増えると同時に、投げ方、跳び方、走り方、登り方など、やり方自身も上手くなり、質的向上も伴う時期である。そのため、運動遊びをいかに経験するかが、子どもの運動能力の発達(量的・質的)に違いをもたらす。また、幼児自身が体を動かすことの楽しさを味わい、多様な動きを身につけることは、その後の体力・運動能力の発達に大きく影響すると考えられる。

### (3) 意欲を育てる援助の在り方

① 幼児の意欲とは (報告書を参照)

② 幼児の自信を培うために

幼児は経験の積み重ねが浅く、環境に興味をもっても、かかわり方を知らず、自らかかわろうとしなかったり、上手にかかわれずに葛藤したり、失敗したりして、自信を失いそうになることもある。そこで、幼児の取り組んでみたいという意欲の芽生えを教師が確かな眼差しで捉え、一人一人の幼児の行動や意欲や心情という内面を理解し、適時に適切な助言をしたり、共に考えたり、活動したり、嬉しい気持ちを共有したり、見守ったりしていくことが重要である。自信を培う教師の役割としては、以下の3つが挙げられる。

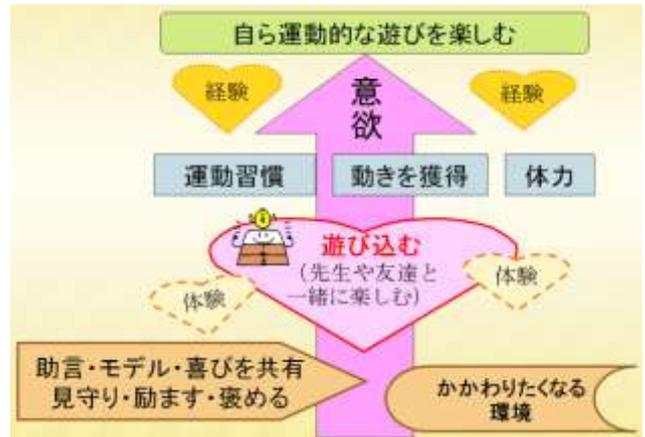
- 一人一人の幼児と信頼関係を形成する。
- かかわってみたくなる環境を構成する。
- 幼児がある目的のために何かをやる過程をサポートする。

幼児の自信は、教師の励ましや援助で、不安を乗り越え、やってみる気持ちになり、実際にやってみたこと、その結果、うまくいき、「やればできる」という自信や嬉しさを感じる経験を重ねながら、培われていく。

③ 進んで体を動かそうとする意欲とは

村岡<sup>6)</sup>は、「幼児の活発に動くことへの意欲を育てることは、自ら運動的な遊びを楽しむ幼児を育てることである」とし、運動場面での運動意欲形成に関する要因を表2(報告書6ページ参照)のようにまとめている。村岡がまとめた運動意欲が育つプロセス<sup>6)</sup>を参考にし、運動意欲が育つプロセスを図式化したものを図2に示す。

幼児なりに環境にかかわり、適切な教師の援助を受け、いろいろな感情体験を味わい、遊び込む中で「運動する習慣」や「多様な動きを獲得」し「体力」が身につくことで、意欲の高まりがみられ、進んで体を動かして遊ぶようになると捉えた。



(図2 運動意欲が育つプロセス 一部修正)

## 2 指導計画

### (1) 幼児の実態把握

① 家庭での実態調査アンケート

② 幼児の遊びに対する意識調査

(報告書の6~9ページを参照)

### (2) 年間指導計画の作成

(詳しくは報告書の10~11ページを参照)

進んで体を動かして遊ぶ意欲を育てるための年間指導計画

	1期(4月~5月)	2期(6月~7月)
発達 の 過程	~幼種園っていいな~ 教師との触れ合いや友達と遊ぶ中で、園生活に 親しみ安定していく時期	~一緒に遊ぼう・やってみよう~ 園生活の中で安定し、気の合う友達とかわわりな がる遊びを自分でいく時期
ねらい	・園での生活の仕方を学び、好きな遊びを見つけ、 安心して遊ぶことができる。 ・先生や友達と一緒に体を動かして遊ぶことを楽 しむ。	①聞く声や声の行動し、完結感を味わう。 〔健康(1)〕 ・友達と一緒にイメージを共有しながら、いろい ろな運動や遊びに意欲的に取り組む。
指導 内容	①先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動す る。〔健康(1)〕 ・触れ合い・遊びや集団遊びを通して、先生や友達 に親しみをもつ。 ・いろいろな遊びを知り、自分なりに遊びしてみよ うとする。	②いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。〔健康(2)〕 ③進んで戸外で遊ぶ。〔健康(3)〕 ・体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。 ・全身を使って運動する楽しさを体験し、できるよ うになったり、上達したりする手応えを感じる。

## 3 保育実践

### (1) 遊びの中で多様な動きを体験させる

① 多様な動きを引き出す援助の工夫

ア 友達と一緒にすると楽しい、共に動く面白さを味わえるような環境を設定する。

イ 幼児がもっているイメージを捉えながら声をかけ、遊具の使い方を考えたり工夫したりできるように援助し、友達と考えを出し合いながら遊び場を作っていくようにする。

ウ 新しい遊具を出したり、使い方を変えたりして遊具の使い方に変化を出し、いろい



## (2) 授業研究会から

- ・子ども達との信頼関係を十分に築くことができているので、高いタワーにも教師が近くにいることで安心し、挑戦する姿が見られた。
- ・運動遊び時には、特に安全面への配慮を十分に行う必要がある。ワニ歩きの場面では、間隔が狭く後ろの子に足が当たりそうになっていた。その事を子ども達に気付かせていくことで、遊びの中で意識して距離感を考えたり、互いに教え合ったりして、自分達で安全に気をつけて遊ぶようになる。

## V 研究の結果と考察

研究内容として、領域「健康」の意義や幼児期の発達の特徴について理論研究を行ったことで、教師の援助の在り方を明確にすることができた。また、保護者へのアンケート調査や幼児への聞き取り調査をもとに実態把握を行い、年間指導計画を作成したことで、見通しをもった活動の展開・援助の工夫を行うことができた。さらに、理論研究を通して明確になった援助を保育実践の中で行うことでその有効性を検証することができた。検証できた有効な手立てとして以下のようなことが挙げられる。

### 1 多様な動きを引き出す援助の工夫

積極的に子ども達のアイデアを遊び島に取り入れていったことで、教師の意図で設定した環境とは異なり、幼児の興味をもった遊びとなり、より遊びに広がりが見られ、体を動かしながら遊びを楽しむ姿を引き出すことができた。このことから、幼児の実態に合わせて、子どもと一緒に環境の再構成をしていくことの重要性が伺える。また、フープは腰で回すだけでなく、手で回したり、転がしたり、輪くぐりとして使ったり、下においてケンパとして使ったりなど、幼児の考えた遊びを教師が認め、褒めたことで「先生、こんな事も出来るよ」「こんなしたら面白いよ」と遊

びや動きを自分なりに工夫することによって、新しい動きと出会い、その動きやその基楚となる感覚を獲得していったと思われる。

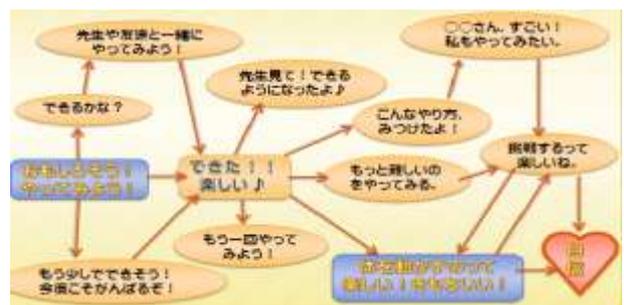
活動後半になると、自分のペースでじっくり遊びに取り組んだ体験が一人一人の自信となり、難しい動きにも夢中になって繰り返し挑戦する姿が見られ、その中で、“挑戦することの楽しさ”“自分の力をだすおもしろさ”“頑張った喜び”などを味わっていったと思われる。さらに、転々とあった遊びコーナーを少しずつつなげていくように援助したことで、遊び島が一つのサーキットのようにつながり、自然な流れで子ども達がいろいろな遊びコーナーに挑戦することができた。

遊び島で十分に遊び込んだことで、多様な動きが身に付き、“動く楽しさ”から“動ける楽しさ”へと変化し、さらなる意欲につながったと思われる。運動的な遊びに消極的だった子ども、公開検証保育時には、教師の設定した新しい動きができるコーナーにも進んで挑戦し、楽しむ姿が見られ、意欲の高まりをみる事ができた。

以上のことから、幼児の興味をもった遊びの中で、教師が多様な動きを引き出すような援助を工夫し、体験させたことにより、「おもしろそう、やってみよう!」「できそう、やってみよう!」という気持ちを持ち、進んで体を動かして遊ぶようになったと思われる。

### 2 意欲を引き出す援助の工夫

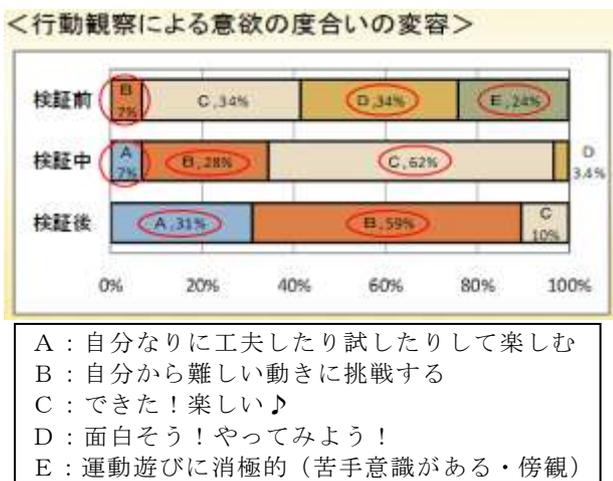
遊び島での思いきり体を動かして遊ぶ体験を通して、挑戦する楽しさや思いきり体を動かす心地よさを味わい、自信へとつながって



(図3 活動を通しての幼児の気持ちの変容)

いった過程を幼児の気持ちの流れとして図3のようにまとめた。

子ども達が「面白そう！やってみよう！」という気持ちを持ち、自分なりに挑戦してみる。そこで、出来た喜びを味わうことで楽しくなり、繰り返し挑戦したり、新しい技を発見したり、難しいことにも挑戦したりする姿が見られるようになる。そこには、「やってみたら、出来た」という喜びや教師・友達に褒められたという嬉しさ、頑張っただけで出来ようになった満足感・達成感などの積み重ねによる「自信」が深くかかっているように思われる。



上記の表は、検証時における幼児の遊ぶ姿の行動観察から見取った幼児の意欲の高まりをグラフ化したものである。活動前半には、運動遊びに消極的なEとDの段階の子が58%いたが、活動途中から「できた！楽しい♪」というCの段階の子が62%に増えている。さらに、活動後半には、体を動かして遊ぶ事を楽しんでいるAとBの段階の子が31%、59%と増えている。

このことから、遊び場で思い切り体を動かして遊ぶ体験を通して、子ども達が様々な挑戦をし、体を動かして遊ぶ楽しさや心地良さを感じたことで、「面白そう、やってみよう」という気持ちから「できた！楽しい♪」という気持ちへと変容したことが、進んで体を動かして遊ぶという活動の変容につながってい

たのだと考えた。また、幼児の実態を踏まえてよりきめ細やかな援助を心がけたことで、一人一人に「できた」という達成感を味わわせることができたと思われる。

以上のことから、本研究で目指す幼児像である「のびのびと思いきり体を動かして遊ぶ子」「自ら運動的な遊びに挑戦し、楽しむ子」の姿を見取ることができ、本仮説を検証することができたと考える。

## VI 研究の成果と今後の課題

### 1 研究の成果

- ・幼児の興味をもった遊びの中で、十分な運動量を確保したり、多様な動きを体験させたりしたことで、新しい運動遊びにも挑戦しようとする姿が見られ、進んで体を動かそうとする意欲の高まりが見られた。
- ・活動時における幼児をみとる視点を明確にしたことで、よりきめ細やかな個に応じた援助をすることができた。
- ・遊びの中で、「これなら、出来そう」という見通しを持たせたり、出来た満足感や達成感を味わわせたりしたことで、自信をもちいろいろな運動的な遊びに挑戦する意欲をもたせることができた。

### 2 今後の課題（取り組み）

- ・室内と戸外の遊びに連続性を持たせ、戸外でも十分に体を動かして遊ぶ楽しさを味わわせたい。
- ・親子で一緒に体を動かす心地よさを味わえるような活動の工夫を考えていきたい。
- ・年間指導計画を幼児の実態に応じて再検討し、実践していく。

#### ＜主な引用・参考文献＞

- ・幼稚園教育要領解説 平成29年10月 文部科学省
- 1) 無藤隆 監修 幼稚園教育要領ハンドブック (2019年改訂版) 学習研究社
- 2) 湯川秀樹 「幼稚園とほろ」第4号 p.15 2019.
- 3) 白石豊 「スポーツの得意な子に習った親子遊び」 P.H.P出版 2016.
- 4) 須賀由紀子 「子どもの身体・運動・遊び 健やかな身体を育む生活文化の探究」 高野女子大学 生活科学部紀要第40号 2016.
- 5) 中村和宏監修 「あそびあそび」 フジサンケイ新聞社 2008年10月号より
- 6) 村岡麻治 「運動遊びを楽しむ幼児を育てる」 愛知教育大学附属施設センター紀要第11号 2008.
- 7) 村岡麻治 「運動遊びに意欲的でない幼児の受容のプロセスと保育者の指導及び後の要因との関係」 愛知教育大学附属施設センター紀要第4号 2001.
- 8) 無藤隆 監修 「事例で学ぶ保育内容 健康」第4巻 南文書社 2010.